

太く短く生きるのがガラガラ蛇の信条。

脱皮して脱皮して、剝那ひしまたきを積み重ねて永遠に至らしめる。

ブレーキを踏む。

減速して止まる。

「連中のアジトつす、哥哥」

「ゴッポさん辛苦了」

「正面から行かれるんですか」

「勿論」

「ミュータントお断りだそうですよ」

正面の門扉には「突然変異体禁止出入」と記した紙が貼りだされていた。

後続車両が立て続けにブレーキをかけ、懐に得物を呑んだ面々が降り立ち、二手に分かれて頭を下げる。

「罷り通る。付いてこい」

助手席のドアを開け放ち、ゴツイブーツを下ろし、左右に整列した黒服たちの中央を威風堂々たる大股で歩く。

颯爽と肩で風切り、パイソンレザーに包まれた足を繰り出

し、磨き抜かれた花崗岩の階段を踏み締める。

お辞儀で迎えた舎弟たちが眼前を通り過ぎた背に続き、派手派手しい柄シャツを継ぎ接ぎの鱗に変え、蛇の尾を成す。

「んだテメエ。今日は貸し切りだ、一昨日きやがれ」

「そりや残念、おごつてもらおうと思つたのに」

「ふざけてんのか？ アブノーマルの蛇野郎はお呼びじゃねえんだよ」

喧嘩腰で立ち塞がる見張りを一瞥、歩調は落とさず右手を翻す。

転瞬、銃声が響く。

サングラスの男が見張りの下顎を撃ち抜いたのだ。

「おい楊しつかりしろ、くそつたれがよくも……出合え、敵襲だ！」

片割れが眉間を穿たれ絶命。

サングラスにはねとんだ血を拭い、「禁止」の二字になすり、招かれざる客筆頭が足を振り上げる。

「これで問題ねエな」

男一員が扉を蹴破るのを合図に、銃撃戦の火蓋が切つて落

とされた。

「蟲中天の襲撃だ、ラトルスネイクが来るぞ！」

「ボスと金庫の中身を守れ、退くんじゃねえ前に出ろ死ぬ気で止めろ！」

「畜生ラトルスネイクが出張ってくるなんて聞いてねえぞ完全に詰みじゃねえか、あの毒蛇はなんもかんも根こそぎにしてく最悪の厄ダネだ、あとにはべんべん草も残らねえ！」

アンデッドエンド最大のチャイナタウン・快樂天の高級料理店は阿鼻叫喚の地獄と化す。

老大哥の命令は敵対勢力の皆殺し。

新興マフィア掃討戦の指揮を任されたのは、いづれ劣らぬ武闘派ぞろいの蟲中天において、大幹部の稚児から成り上がった異色の経歴の男。

縦横無尽に銃弾が飛び交うなか、東洋の壺やら花瓶やらを展示した長い廊下を旗袍チンパオに身を包んだ女が逃げ惑い、長袍チンパオを着た男が配膳ワゴンに覆いかぶさるように倒れ込む。

「私はただの店員で裏社会とは関係ありません、会合の内容容なんて聞いてません、後生です命だけはお助けてください！」

「きゃああああつ！」

横転したワゴンから総菜が雪崩れ落ち、床で跳ねた銀盆が銅鑼でも叩くようにけたたましく鳴り響く。

「あくあもつたいねエ」

行く手に横たわる死体を引つ立て、肉盾にして進む傍ら弾込め。

野太い雄叫びを上げる巨漢。突撃する小男。青龍刀の湾曲した刃が残像を曳いて宙を薙ぎ、鎖鎌の分銅が柱の表面を穿ち、跳弾が死角を突く。

呉が率いる兵隊たちは柱の影や台座の後ろに隠れ、指示を待っていた。

「いけ」

蜂の巣と化した死体をかなぐり捨て、自陣に散開を促す。

兵隊たちがトリガーを引く。火花散る剣戟と銃弾の応酬。戦況は蟲中天に有利に働く。それもそのはず、呉が引き連れてきた少数精鋭の若手は小回りが利く。彼等の体には多かれ少なかれ爬虫類の特徴の鱗が現れていた。

「幹部は奥の間のVIPルームだ。手が空いてるヤツあ裏口に回り込め、車を蜂の巣にしとけ」

会議中に攻め込まれた新興マフィアは甚く動揺し、店に籠城して迎え撃とうにもろくに統率がとれてない。

音速で飛来する弾丸を直感で回避、頭を屈めて走り出す。

「呉哥哥！」

味方の呼び声は銃声にかき消された。素早く前転して射線を脱し、跳ね起きると同時に柱を蹴り、腰に捻りを加え跳躍。視界が逆転しあんぐり口を開けた敵味方の顔が遠ざかる。

着地点は真つ赤な円卓の上。椅子に掛けていた敵幹部が一斉に腰を浮かすも、遅い。

料理皿をけたたましく踏み付け、鎌首もたげる蛇に似たしなやかさで手を仰げ反らせ、特別詔えの二挺拳銃をぶつばなす。

「うぐっ！」

「ぎゃっ！」

「ははっ！」

今日も絶好調。

尽きたそばから弾丸を装填し、円卓を囲む敵を片つ端からぶち殺す。大量の返り血浴びて踊り狂い、撃って撃って撃ちまくる。ドギツクギラツクレンズの奥、殺意を研いだ琥珀の瞳が炯々と輝き、鉄火場で無双する顔に好戦的な笑みが浮かぶ。

敵幹部が瀕死の痙攣を起こす。

「喜べ老板ラオバ、ラトルスネイクのおでました」

敵勢力がほぼ全滅したのを確認後、卓上の破片を踏み砕い

て本命のもとへ歩いていく。

「偉そうなヤツを見下すのは気分いいな」

ボスは動けなかった。両隣の側近は倒れている。電光石火の早撃ち。のみならず、動体視力と反射神経が卓越している。

絶体絶命の窮地に陥ったボスは歯噛みし、若造になめられまいと虚勢を張る。

「毒蛇を刺客によこすとは蟲中天もヤキが回ったな。爬虫類の派閥が台頭し始めたと風の噂に聞いたが……」

「俺様ちゃんがその急先鋒。見事な牙だろ、伏して拝めよ」

鋭く尖った犬歯を剥き、ボスの眉間に銃を擬す。

「処される理由は明快、蟲中天ムシウチンのシマを荒らしたから。上の連中はブチギレてる」

「ゲスな蟲けらどもが」

「女をヤク漬けにして斡旋してる外道が。泰山夫君に申し開きしてこい」

直後、死体の山が蠢く。

幹部の骸の下敷きになり、辛うじて即死を免れた従業員が

いた。

「ううっ……たすけて……」

ボスの行動は迅速。

死体の吹き溜まりから這い出た女を捕まえ、人質として引き立てる。

「寄るな、コイツがどうなつてもいいのか！」

呉が片眉を跳ね上げる。

対するボスは脂汗でギト付く顔に壮絶な笑みを浮かべ、女の乳房に銃を埋め込む。

「どけ。道をあけ」

「ろ」を言い終わる前に悪運と寿命が尽きた。ボスが大きく仰け反り、眉間の穴から脳漿が飛び散る。

最期に目に焼き付けたのは、自分に向かってまつすぐ銃を構える男。

「ひっ……!」

一発二発三発。シリンダーが高速回転し、後ろ向きに倒れ行くボスの体が跳ねる。

至近距離で血と肉片と脳漿を浴びた女が凍り付き、膝から崩れ落ちるのを抱き止め、呉が優しく囁く。

「災難だったな小姐^{シヤウシエ}」

「あ、あの、謝謝」

迷わずトリガーを引き、残り一発を眉間に撃ち込む。

「老大哥の注文は皆殺し。目撃者も例外じゃねえ」

驚愕の表情で息絶えた女を寝かせ、死屍累々の惨状を呈す廊下を突っ切り、再び敷居を跨ぐ。

生き残った舎弟は約半数。

当たり前のように助手席に乗り込んで胸ポケットの煙草を摘まみ、舌打ち。

「運転手いねーじゃん」

彼は入り口付近で死んでいた。ラトルスネイクの蛮勇に憧れ、蟲中天の門戸を叩いた若者だった。

やむをえず代役を指名し車を出す。

行き先は昔馴染みが運営するスラムの教会。

錬鉄の柵沿いに車を止め、鮮やかな身ごなしで敷地に忍び込み、口笛を吹きながら寮に入る。

「アウルーシャワーと服貸してくれー」

「ひっ!」

「きゃっ!」

「何事?!」

全身返り血にまみれた呉の姿を一目見るなり、修道女たちが卒倒せんばかりに青ざめる。構わず行こうとしたら裾を掴まれた。

「ちよつとアナタどうなさったんです、お怪我でもされたんですの!？」

「神父様はいま礼拝中でお忙しいんですよ、出直していただませんか」

「血の匂いを纏つて来られたら子供たちが怯えますわ、ご自重してくださいませ」

「拳銃はお預かりします」

「あーあーうるせえなあ」

耳の穴をかつぽじつて非難を聞き流し、修道女たちの足元に分厚い札束を放つてよこす。

「お布施」

「まっ!」

「どうされました？」

怒り心頭の修道女たちを宥め、漆黒のカソックを纏つた神父が進み出る。

「ああ神父様、またミスター呉が」

ご注進に及ぶ修道女の顔を素通りし、神父の腕をひつたくつて部屋へ連れていく。

「抗争帰りですか」

「見りゃわかんだろ」

「今回は何人殺したんです」

「いちいち勘定してねえ。二十人位?」

乱暴に扉を開けて閉じ、血が染みた柄シャツを脱いで裸をさらす。呆れ顔の神父をベッドに押し倒し、性急な手付きでカソックをひんむく。

仰け反る首筋に噛み付き、鎖骨のふくらみを吸い立て、引き締まった腹筋を唇でなぞっていく。

「せめて身を清めてきたらいかがですか」

「待てねえ」

呉は酷く昂っていた。

抗争の直後は悩ましい火照りと破壊衝動を持って余し、必ず教会に立ち寄る。軋むベッドの上、神父を組み敷いて犯す。欲望に乗っ取られた荒々しい前戯。

「ツふ、んっ、眼鏡とロザリオを外させてください」

「そのままかまわねえ。見せ付けてやろうぜ」

「ならカーテンを」

窓の外では子供たちが遊んでいた。

切れ切れに訴える神父に興ざめし、無造作にカーテンを引く。

これでいい。邪魔者はいない。

薄暗い部屋にふたりきり、ジーパンをずらし勃起した陰茎を取り出す。

「~~~~~ツあああ」

ろくに慣らしもせず突っ込み、腰を挿んで揺すりたてる。締め付けのキツさが快感に昇華され、前立腺を狙い定めて突きまくり、一方の手で股間をしごく。

「ガキが遊んでる横でケツ振ってんじゃねーぞ、変態マゾ神父」

「ツぐ、はっ、ああ」

「どうした、感じちまつた？ カソックの下で熟れた体を持て余して、キリストさんに慈悲を乞うなんざ因果な商売だぜ」

長い付き合いだ、遠慮はいらねえ。

カウパーの濁流を会陰に揉み込み赤黒い怒張を抜き差しする一方、肩口や上腕に噛み付いて痛みを与える。

「あッ、やめ、ツぐ」

「問題ねーだろ、どうせカソックで隠れちまうんだし。全身に付けてやるよ。ていうかマジ終わってんな、前も後ろもグチャグチャドロドロ。正直言えよ、強姦されて悦んでんだろ。昔から変わってなくて安心したぜナイトアウル、

俺様ちゃんに無理矢理されんのが大大好きだもんな」

「自信、過剰、ですよ。うぬぼれはやめてください、貴方だつて私の下でさんざん喘いだじやないですか」

「ありやお芝居さ、付き合つてやつたんだ」

「後出しはするい、ツは！」

神父の尻を平手で叩き、シートに膝這いにさせ、抽送のペースを上げる。

「ツふ、んんっ」

太いペニスで潤んだ粘膜をごりごり削り、一際敏感な前立腺を押し潰す。

サディスティックに舌なめずりし、後ろ髪を挿んで押さえ込み、精力絶倫の抽送を続けながら耳をしゃぶる。

「イきてえ？」

「あぐ、誰っ、が」

「汗だけでイキるんじやねーよ、イきてえならそういえ」

「あッ、ああっ、ラトル」

行為の中しか呼ばない愛称で呼ばれ背筋がぞくぞくする。

汗と涎をしないとどに垂れ流し喘ぐ痴態がこれでもかと征服欲を煽り立て、ペニスを意地悪く捏ね回し、くびれを押さええて射精を塞ぎ止める。

「ラトルいきた、イかせてください、ふっあ」

「もつとでけえ声で。修道女やガキどもに聞こえる位」

「あつ、ああつ、やめ」

「カーテン開くぞ」

カソックから零れた白い肌に劣情し、首筋に咲く赤い痣を食み、二股の舌でちろちろ刺激してやる。

「言えよ、ホントは俺様ちゃんが来んの一人でしながら待ってたんذار。前だけじやイケねーもんな、後ろをいじくつてんのバレバレだ。なあ教えてくれよアウル、ロザリオでアナルほじってんの？ 聖母マリアや救いの御子のご尊顔にぶっかけながら絶頂すんの」

「してませんよ貴方以外とは」

「ド淫乱が。ケツ叩かれておっ勃ててんじやねーぞ」

「あツ、あつ、あッ」

貧相な尻を平手で打擲、シーツをかきむしり悶える神父の鎖をぐいと引く。

まだ足りねえ、まだまだ足りねえ。

全部全部ぶっ壊してえ。

体内に挿入したペニスをずりりと抜き、カソックで神父の腕を縛り上げ、両脚を大胆にこじ開ける。

「不始末な体だなア、滴ってるぜ」

「ッ……、」

「乳首もコリコリしこつたら。剥きたてのクリみてえに感度抜群」

「ッああつ！」

胸の突起を弾かれ喘ぐ。暴かれた裾の下、ペニスは赤く屹立していた。

「さわ、らないで、くださ、あうっ」

続けざまに弾いて抓り、強弱付けて吸い転がす。痛みと羞恥が倒錯した性感に置き換わるほど調教が進みきった事実を恥じ、息を荒げた神父が唇を噛む。

「ほどいてください」

「やだね」

割り開いた膝の真ん中に挟り込む。串刺し。鼻梁にずれた眼鏡の奥、薄つすら開いた糸目に苦痛の色が浮かぶ。

「ラトルつ、あつぐ本当にやめ、あうつ、んっふ奥当たつ、貴方で一杯、ああつイクつ」

「イケよ」

ずんずん突き上げる。額に汗が滲む。神秘的な紫の瞳が淫蕩に濁り、赤毛を散らして堕ちていく。

「~~~~~」

「ああつ」

大腿開きで激しく痙攣、大量の白濁をとばす。まだ終わりではない。

相手が絶頂に達してもペニスは抜かず、余韻に浸らせるのをよしとせず、ガツガツ勢いを増して叩き付ける。

「あつぐ、もつやめつ、あつ苦しッ、もつ止まらなッ、ンっあつ許してください」

「興ざめなこと言うなつて、俺様ちゃんはまだイつてねーんだ、しまいまでご奉仕しろよ」

「あッ、あッ、ああッ」

直腸の粘膜が複雑にうねる。絶頂が近付く。

貪欲な肉壁に締め上げられたペニスが震え、神父の腹に濃厚な白濁をぶちまける。

都合三回犯した。

最後は目隠しで。